

うんこ例文 コンテスト 結果発表

1年生漢字の部 テーマ「入」

うんこ漢字ドリル作者
古屋先生と選んだぞい！



優秀賞

うんこに、アリの入り口をつくりました。

ニックネーム かぼくん ねんれい 7さい

「うんこに入り口を作る」という発想だけでも目の付け所が素晴らしいが、そこに「アリの」と具体的な言葉を添えたところが大事なポイントです。こういった「具体性のある余計な一言」こそが、うんこ例文に奥行きをもたせるテクニックなのです。そして何よりも、アリのためにうんこに入り口を作ってあげるといふ行為には「愛」がありますね。うんこ例文に求められる「ポジティブなヴァイブス」に溢れた名例文です。



優秀賞

さあ、つづいてはうんこの入じょうです。

ニックネーム せいやくん ねんれい 8さい

「うんこ」と「入場」で例文を作るとしたら普通は「うんこを持って入場する」などになりがち。そこを「うんこ(そのもの)が入場する」と大胆な情景にしているところに沓えを感じます。最大のポイントは「さあ、続いては」という導入の文節です。これによって、当該のうんこ入場のシーンのみならず、「これまで他に何が入場してきたんだろう」「うんこは何番目くらいの入場なのかな。やっぱり最後なのかな。」と、「例文の前後」まで想像を膨らませることができます。このように「時間の概念」を含んだ例文は面白さが格段にアップします。



最優秀賞

ふうせんの中にうんこが入っていた。

ニックネーム かずきくん ねんれい 6さい

「○○の中にうんこが入っていた」と空欄があったとしても「風船」というのはおそらく大人はあまり考えないと思います。しかし想像してみると実に幻想的で美しく、かつ「どうやって入れたのだろう」と理科的な好奇心にも火を付けてくれる状況です。こういった「不思議な光景」、「物理法則を無視した光景」を描き出した例文(しかもシンプルな!)を作ることができるのは、かなりの上級者だと言えるでしょう。



うんこ例文 コンテスト 結果発表

うんこ漢字ドリル作者
古屋先生と選んだぞい！

2年生漢字の部 テーマ「春」



優秀賞

うんこをしていたら春が来ました。

ニックネーム たいくん ねんれい 7さい

古来より幾多の詩人が「春の訪れ」を感じるようすを句に詩に詠んで来ましたが、うんこを使ってこのような切り口で表現できることに驚きを禁じえません。うんこをし始めたときは冬であり、その途中で、まさに春へと切り替わった—。この「時間のスケール感」たるや、まるで中国古典を読んでいるかのようです。時計盤の一分一秒、カレンダーの「スケジュール」の中を生きている現代人の時間とはまた別の、悠久の時の流れ。そんな次元へのアクセスを可能にさせてくれる、名うんこ例文です。



優秀賞

春になるとうんこが一万個でる。

ニックネーム けいしくん ねんれい 7さい

お題が「春」という漢字であるため、応募されてきた例文も、季節の美しさや、うきうきした希望を表現したもの、いわば「春らしい」ものが多かったようです。そんな中で「春になるとうんこが一万個でる。」という例文はとてもバツワル、エネルギッシュであり、前半の「春になると」から後半の「うんこが一万個でる」という意表を突く展開は異彩を放っていました。冬という「静」から春という「動」への転換、生命の躍動感にも満ちた、力強い例文です。漢字の持つ意味合いに沿った例文の良さも勿論ありますが、「ギャップ」を意識してうんこ例文を作成すると、強く読み手の心に響きます。



最優秀賞

春の植物を探し草むらでうんこをふむ

ニックネーム リクくん ねんれい 7さい

「春の植物を探し草むらでうんこをふむ」。ぜひ声に出して音読していただきたいと思います。この、句読点もなにもない素朴な例文に、しかし限らない可能性、奥行きを感じるのは何故でしょう。装飾のない、剃刀のような「言い切り」の鋭さに、その秘密があります。「うんこをふんだ。」ではなく、「うんこをふむ。」単なる情景、いや、光景の、ドキュメンタリックな「記録」ですらなく、ここにあるのは「言い切り」の力強さのみです。しかしだからこそ、「春の植物を探し」という楽しげで色鮮やかな前半と、「うんこをふむ」というエンディングとのギャップが、悲壮感を与えることなく、むしろ温かみを持って一つの例文に収められているのです。淡白な読み口と、それにそぐわない豊かな読後感。山頭火の自由律俳句「分け入っても分け入っても青い山」をも思い出させる、実に趣深いうんこ例文です。



うんこ例文 コンテスト 結果発表

うんこ漢字ドリル作者
古屋先生と選んだぞい！



3年生漢字の部 テーマ「進」

優秀賞

ぼくはあの金色に光りかがやくうんこに向かって進みます。

ニックネーム ゆっちゃんくん ねんれい 8さい

ポジティブなエネルギーの塊のような素晴らしいうんこ例文です。例文を読んでどのような光景を読み取るかは個人の見え方次第ですが、私は、人生という旅のわかれ道で、それぞれが自らの進路を定め、決意に満ちた表情を浮かべる場面を頭に描きました。覚悟、希望、好奇心、不安、勇気。そんな複雑な気持ちを抱きながら、「ぼくはあの金色に光りかがやくうんこに向かって進みます」と宣言する、一人の男子。彼の行く先に、明るく豊かな道のりが待ち受けんことを。応援します。



優秀賞

うんこは気にせず進め！

ニックネーム はるるるるくん ねんれい 8さい

文としてはいささか砕けすぎている印象ですが、端的で鋭い切れ味ゆえに例文としての体裁を保っていると思います。とにかく「うんこは気にせず進め！」という切羽詰まった台詞から読み取れる情報が非常に面白い。命令調ですから、この場面には、少なくとも「指導者」と「受け手」のような二者が存在するのですが、指導者の言っていることはかなり無茶で、受け手側の困惑する表情も容易に想像がつき、可笑しみを誘います。しかし、指導者も、もうそう叫ぶしか手が無い状況なのでしょう。退路が断たれているのか。はたまた、ここを前進できるかどうかで「受け手」の成長が左右される分水嶺の場面なのか。少ない語数で多くのイメージーションを喚起させる、優れたうんこ例文です。また、使えるテクニクとして、「うんこ」という単語はこのように緊迫したムードと相性が良いことを覚えておいてください。



最優秀賞

かんぜんに丸いうんこに進化した

ニックネーム 鹿のうんこくん ねんれい 8さい

短い例文ですが、ユニークな世界観がさり気なく込められているため、読み手の想像力を刺激して楽しい気分させられます。まず素敵だなと思うのは「うんこが進化すると丸くなるんだよ。」という、オリジナルの世界観。設定ですね。進化という複雑な形状になっていくように考えがちですが、よりシンプルなる形に収斂していく、という発想が新しいし、実はアカデミックです。また、「うんこが進化して丸くなった」や「うんこが進化すると丸くなる」ではなく、「かんぜんに丸いうんこに進化した」という言い回しに職人的技術を感じます。「完全に」という副詞を添えることによって、逆に「そうか、じゃあ不完全な状態というものがあるのだな」と、「進化の過程」、「球状体への移行途中フォーム」への想像も暗に促している。「進化」とはデジタルではなくアナログな概念であるという実に大事な本質を、鹿のうんこくん(8)は表現していると思います。



うんこ例文 コンテスト 結果発表

うんこ漢字ドリル作者
古屋先生と選んだぞい！



4年生漢字の部 テーマ「好」

優秀賞

好きなものは「うんこ!」と言えなかった

ニックネーム レゴまんくん ねんれい 9さい

「好きなものは「うんこ!」とさげんだ。」ではなく「好きなものは「うんこ!」と言えなかった。」という例文にしたところから、レゴまんくん(9)の悔しさ、残念な気持ちがひしひしと伝わってきて、一読して涙がこぼれそうになりました。何かを「好きだ」と胸を張って言えないつらさは、独特のもので。子どもならそれは尚の事でしょう。もちろんこれはレゴまんくんの体験談ではないかもしれませんが、たまたま、このように、ほんの少し視点やフレーズを工夫するだけで、読み手に多くの感情を伝えられるのだということに気づいておいてほしいと思います。「うんこ哀愁賞」を贈呈したくなるほど心に深く沁みるうんこ例文でした。



優秀賞

全人類が好む、うんこを発見した。

ニックネーム うんこ大魔王くん ねんれい 10さい

「好」この漢字自体が持つ「正の波動」とでも申しましょうか、前向きでポジティブな空気をまとった例文が多数見受けられる中、本例文はさらに頭一つ抜けていました。この例文から放たれる「吉報感」たるや、他に類するものはありません。人の好みはそれぞれ、というのが酸いも甘いも噛み分けた大人の見解であると思いますが、そんな相対的なものの見方に終止符を打つような内容です。地球上に生きる全ての人類が、例外なく、このうんこの前でだけは、「好き」という感情で一つになれる。何とも愛に溢れた、ハッピーな例文ではないでしょうか。そして、このような奇跡のうんこの「発見の瞬間」にカメラを置いたうんこ大魔王くん(10)の視座のセンスにも喝采を送りたいと思います。「どの視点にカメラを置かか。」「どの瞬間にシャッターを切るか。」というセンスは、うんこ例文作りの奥義と言っても良い重要点ですので、別の機会にゆっくり論じてみたいと思います。



最優秀賞

うんこはぼくのことが好きすぎて学校までついてくる。

ニックネーム こーぺーくん ねんれい 9さい

うんこ例文づくりにおいて常に意識していただきたいコツは「視点の切り替え」です。「好」という言葉と「うんこ」を組み合わせる時、まず考えるのが「ぼくは(〇〇)は→ うんこが好きだ」というような関係性のベクトルでしょう。それが普通です。この例文は、それを180度反転させることで「うんこは → ぼくが好きだ」という関係性を創出していますね。「好き」という言葉は本来双方向の可能性を持っているはずですが、「うんこはモノだから」という固定観念に縛られてしまうと、発想が制約されてしまうこととなります。なおかつこの例文の秀逸な点は「うんこはぼくのことを好きだ」という荒唐無稽とも言えるアイデアを出発点に、さらなる「情景のディテール」を描いていることです。うんこをペットや年下の兄弟のようにイメージした上で、「どれくらい」「どのように」好きなのか、というディテールを、想像力を働かせ、表現しました。その結果、「学校までついてくる。」と、実に健気でかわいらしい、ほのぼのとした一場面が生み出され、荒唐無稽なアイデアに、妙なリアリティが宿っています。出来栄としては満点に近い、天才的なうんこ例文です。



うんこ例文 コンテスト 結果発表

5年生漢字の部 テーマ「桜」

うんこ漢字ドリル作者
古屋先生と選んだぞい！



優秀賞

うんこまみれになりながら、桜を見る

ニックネーム ひーくん ねんれい 10さい

「桜を見る」という風流な行為と「うんこ」の相性はもともと良いのですが、安易な組み合わせではなかなか突出した化学反応は期待できません。たとえば「うんこをしながら桜を見る」や「うんこを手を持って桜を見る」などの例文と、「うんこまみれになりながら、桜を見る」とでは、破壊力が圧倒的に違うことが分かります。「まみれになる」というくらいですからちょっとやさそつのうんこ量ではないですし、必死感も鮮やかに伝わってきます。そんな異常事態でありつつ一方で「桜を見る」風雅な心を忘れない。せっかくの美しい語句ですから、組み合わせるのであればこのくらい振り切ったフレーズを合わせてみましょう。メリハリのあるうんこ例文が作成できると思います。また、この例文から、近年の狂騒曲めいた花見バブルの現状を冷徹に描いた風刺眼を感じる方もおられるかもしれませんね。



優秀賞

桜が散るように美しくうんこを流す

ニックネーム ゆずちゃん ねんれい 10さい

日本人の感性を驚掴みにするかのような、凛とした美しさを湛えたうんこ例文です。まず「桜のように美しく」ではなく「桜が散るように美しく」であるところに注目していただきたいと思います。綺麗な色の花を見て感じる「美しさ」と、その散りゆくさまに見出す「儂い美」は性質が異なります。ゆずちゃん(10)は、齢十歳にして、滅びゆく夢幻泡影の美しさをうんこ例文に込めんとしており、その芸術的感度の高さに思わずうなっていました。そして「桜が散るように美しく」、何をするのかと思えば「うんこを流す」。このギャップ。うんこを流すと言えば、だいたい水洗レバーをひねるかスイッチを押すかくらいのものだと思います。いったいどのようにすれば、それを「桜が散るように美しく」行うことができるのか。想像力の翼を広げ存分にイメージする余地を有した、エレガンスな作例ですね。



最優秀賞

該当なし

ニックネーム ねんれい

該当なし



うんこ例文 コンテスト 結果発表

うんこ漢字ドリル作者
古屋先生と選んだぞい！



6年生漢字の部 テーマ「欲」

優秀賞

黒板に向かって、うんこを投げてみたい**欲**求。

ニックネーム ふうはるるくん ねんれい 7さい

文の最後を名詞で終える「体言止め」の技術が使われています。うんこ例文作りにおいて、体言止めの頻繁な使用はあまり推奨しませんが、この例文は、体言止めによってなかなかおもしろい味わいが付与されていますね。「黒板に向かってうんこを投げたい」といういかにも小学生男子的な発想と、「欲求」というやや難しげな語句の組み合わせに本例文の面白みがあるわけですから、体言止めをすることでさらにその「高尚っぽさ」に拍車をかけてあげることができる。つまり体言止めを使う意味があるわけです。また、このようなモラルや道徳的に危なっかしい内容を表現する時、体言止めをすることによって、その内容の「善し悪し」に言及せず済むというメリットもあります。



優秀賞

うんこ、もっと早く出て**欲**しかった

ニックネーム らかちゃん ねんれい 13さい

うんこというものは、なかなか思い通りに「出る・出ない」をコントロールできないものです。うんこ例文を読むにあたって、そういった悲哀をモチーフにすると、上手く行くことが多々あります。例えば「うんこをもらす」というものが、まさにそれですね。思い通りにならない。ゆえに、時にはもらすこともあるわけです。今回のらかさん(13)の例文は、そんなモチーフを扱ったうえで、さらにユニークな趣向が凝らしてあって目を引きました。「もっと早く出て欲しかった」ということは、実際に出たうんこは望んでいたタイミングよりかなり遅く、いわば「今ごろになって」出たわけですね。もしかしたら、「何で今ここで」というタイミングで出てきた(=もらした)のかも知れません。さり気ない言い回しですが、時系列を自在に行き来して表現する技術に、未恐ろしいものを感じます。



最優秀賞

「うんこを出すことを**欲**する」と、父が言い出す。

ニックネーム モナカちゃん ねんれい 14さい

いいですね。非常に上手く作られたうんこ例文です。気づいていただきたいのは、単に「うんこを出すことを欲する。」だけで一つの例文とすることもできたはず、ということです。しかしそこに「～と、父が言い出す。」というフレーズを追加している。これが技術その一です。「うんこを出すことを欲する。」という文は、少し日本語として無理があり、かと言ってその無理なおかしみを楽しむにはやや弱い。そこで、これを台詞とした。カギカッコの中に入れたわけです。そんな台詞を言う、父の面白さに変えたわけですね。そして「～と、父が言う。」ではなく「～と、父が言い出す。」であることにも着目してください。これまでそんな口調ではなかったはずの父が、ある日、唐突にこんな台詞を「言い出した」。言い出した、その瞬間に、シャッターを切ったわけです。これが技術その二です。意味不明であり、不穏なシーンであると捉えることもできますが、例文作成者のモナカさんが十四歳の女子であることを考慮すると、そんな意味不明な発言をする父をモナカさんが「若干ウザがっている」様子が伝わってくる気もします。そんな様子も含めて、このうんこ例文には、ほほえましい気持ちにさせていただきました。

